倉敷市立葦高小学校　学校便り
せりんどう
令和４年度　No.１３
令和４年１２月５日発行

「人権週間！」・・・自分の『言葉』について、考えよう！

今日、１２月５日（月）から「校内人権週間」です。各学級で人権に関わる目標を立て、一人ひとりを大切にし、お互いを認め合い、助け合う心情を育んでいきます。学校全体では、運営委員会を中心に、人権標語を掲示したり、お互いの良さを認め合う「グッドカード」を書いたりしながら、お互いを大切にする取組を進めます。

私は今朝の人権週間のテレビ朝礼で、詩人、彫刻家、画家として有名な高村光太郎さんの言葉「きれいだなぁというと景色がなおきれいになる。」という言葉を子どもたちに紹介して、自分が発する「言葉の大切さ」「言葉の力」について考えるように呼びかけました。

高村光太郎さんは、愛妻家で「智恵子抄」という妻に関する詩集も出版しています。当時としては珍しい女流洋画家だった妻の智恵子も光太郎と同じく、感情豊かな人で、言葉を大切にする人でした。自然豊かな、今の二本松市（福島県）に育った智恵子は「東京には本当の空がない。本当の空が見たい。」と光太郎につぶやき、光太郎は彼女の言葉と気持ちを大切にして、ふるさとの空を見せてあげようと一緒に旅に出たそうです。そこで、彼女は、きれいな風景に出会い、感動して、いろいろな言葉を発しました。

「人権」を考えることは
自分の「言葉」を考えることから始まる。

きれいなものを見た時に、人は感動するものです。それを自分の心の中にそっと大事にすることもあるでしょう。でも、その感動を素直に「きれい」と言葉にすると、周囲の人に伝えることができます。それはその景色の美しさにあまり関心のなかった周りの人にも気付かせることにもなります。また、自分の声が自分の耳に返ってきて、その景色の美しさは、目からだけではなく耳からも入り、全身で感じることができます。だから、私は高村光太郎さんの「きれいだなぁというと景色がなおきれいになる。」という言葉を聞いて、ますます「言葉の大切さ」「言葉の力」を痛感しました。

言葉には不思議な力があります。思っているだけだと曖昧に感じることでも、表現すると確かなことになります。また、表現した言葉は自分に返ってくるものです。だからこそ、優しく思いやりのある言葉をつかわなくてはならないのです。相手を「バカ」と言ったら、自分に「バカ」と言っていることと同じになります。言葉の持つ影響力は大きいです。優しい言葉は、ほかほかした温かな雰囲気を作り出し、汚い言葉は、とげとげした殺伐とした空気をつくります。

たった一つの言葉で、うれしくなったり悲しくなったりすることは子どもたちも経験しています。子どもたちには「人権」というたった二文字の意味を正しく理解し、常に意識して行動できる人になるためには、自分の「言葉」について考えていくことが大切だと気付いてほしいと、心から願っています。

校長　藤井　朗

子どもたちとともに考えた言葉

「言葉」は「こだま」
「言葉」は「言霊（ことだま）」
「言葉」は
「もう一人の自分」